あすなろ通信

学校配信用　　平成２６年１２月１日

NO. 58　　発行元　あすなろ会

同じ相手とトラブルを繰り返すわけ

私たちは、子ども同士がトラブルを起こしたとき、一方だけを指導することはありません。お互いが相手を理解し、関わりを改善するように最善の努力をします。

互いの事情を聞き、お互いが納得できるような状況を作り出して、「これからは、仲良くしようね。」と指導し、その後の様子を見ることになります。

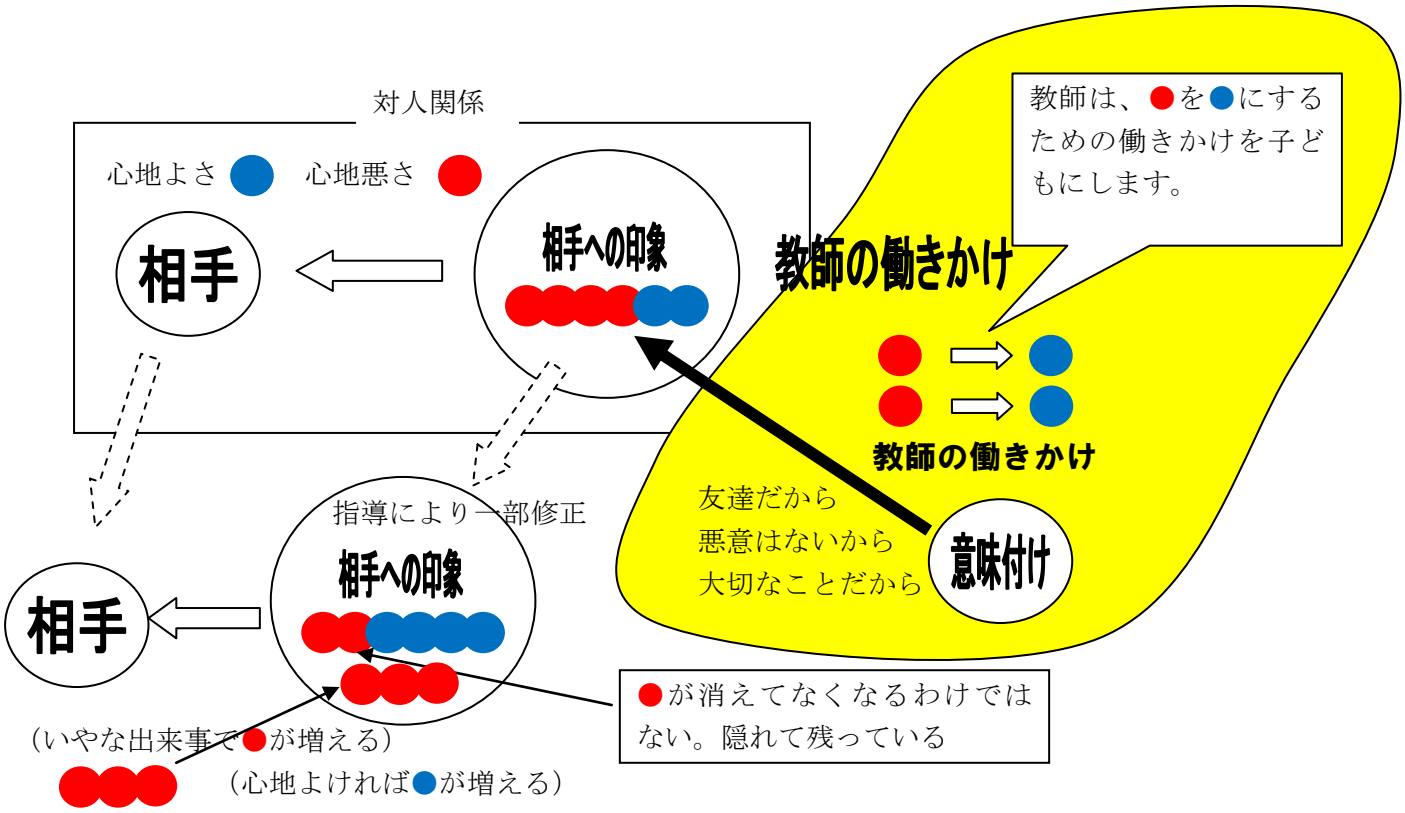
脳の働きから考えると、意識レベルでは「仲良くしなければいけない。」とわかっていても無意識レベルでは、仲良くできない嫌な感情が残っている事もあります。この感情があると、形が変わるだけで、同じ子どもとトラブルを起こすことがあります。

脳は、常に安全･安心のために働きます。その情報は、五感で得ています。視覚、聴覚、触覚、臭覚、味覚を使って自分の中に入ってくる情報をキャッチし、心地よければ受け入れるように、そして、心地悪ければ拒否するように記憶に残ります。どちらも記憶の中に残っているのです。信頼関係ができている時は、心地よい面を強調して見て、心地悪さの面は見ないようにしているだけです。どちらの感覚も記憶として残っています。消えてなくなるわけではありません。

対象が、人であっても、物であっても、事柄であってもすべて同様です。どちらの感覚も残っています。

この心地よさや心地悪さは、相手に対するイメージによって決まります。（好き嫌いも同じです。）

トラブルを起こした場合は、相手に対するイメージは、すべて心地悪いと考えがちですが、そうではありません。五感すべての情報を総合判断したときに、心地悪い方が多ければ（強ければ）、そちらが優位になるというものです。ですから、どちらの感じ方も記憶の中に残っていることになります。



教師の働きかけによって、その場では変わっても、心地悪さは、消えることなく残っています。これが、次のトラブルの時に蘇ります。例えば、「だって、この前～だったから。」「いつも～する。」などと相手に対して固定したとらえ方を言うことがあります。これは、心地悪さが残っている証拠です。

この記憶を変えるには、新たな体験の上書き保存が必要になります。